平成28年度　全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　藤松　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語，算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1．調査の目的

⑴ 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵ 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶ そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2．調査内容

⑴ 教科に関する調査（国語，算数）

主として「知識」に関する問題（A）	主として「活用」に関する問題（B）
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

⑵ 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

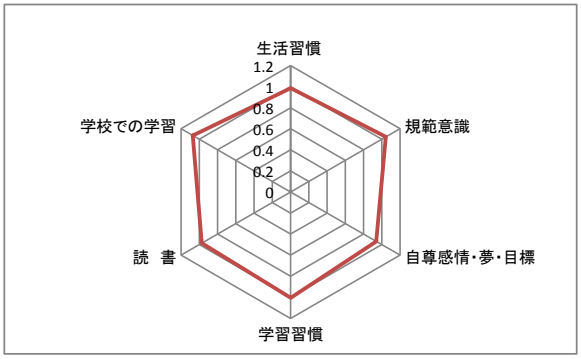
⑴ 全国・本市の学力調査（国語A・B，算数A・B）の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.4	70	5.6	56	12.1	76	5.8	45
全国	10.9	73	5.8	58	12.4	78	6.1	47

⑵ 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均をやや下回っているが，中でも文章を効果的に「書く」ことについての理解に課題がある。 ・普段使い慣れない漢字の読みやローマ字の読み書きに課題がある。日頃から語彙を増やし，目的をもって文章を書く指導に力を入れる必要がある。	全国平均正答率との比較：下回っている
	よくできた問題	漢字の書き取り問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	ローマ字の書き取り問題や，登場人物の人物像について叙述を根拠に捉える問題の正答率が低かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均を上回ることができたが，無回答率の低さも際立っている。記述式の問題にもねばり強く自分の考えを書くことができている。 ・複数のテキストを関係付けながら的確に読み取り，自分の考えを述べることができている。	全国平均正答率との比較：上回っている
	よくできた問題	資料を比べて読んだり，目的に応じて内容を的確におさえたりと効果的に読む能力を必要とする課題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて資料を選んだり，自分の考えを書いたりする課題の正答率が低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均をやや下回った。特に数量関係についての知識・理解の定着に課題がある。各学年での確実な定着と地道な復習が必要である。 ・図形についての技能や知識・理解の定着の度合いが高く，操作を伴う算数的活動の成果が表れたと考える。	全国平均正答率との比較：下回っている
	よくできた問題	小数，分数の計算や図形の構成など、技能を問う問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	除数の大きさと商の大きさの関係や，数の大小関係，百分率などの基本的な知識・理解を問う問題の正答率が低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全体的に全国平均を上回ったが，特に図形に関する課題については10ポイント以上上回っている。算数Aと同様，操作を伴う算数的活動の充実により図形についての見方や考え方，応用力が高まっていると考える。 ・記述式の問題の無回答率が全国平均を大きく下回っている。	全国平均正答率との比較：上回っている
	よくできた問題	図形を構成する要素や，面積と辺の長さの関係について問う問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	乗法や除法の式の意味を考え，説明する問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

・就寝時間が安定していて，テレビ等の視聴時間，スマートフォンの使用時間などが全国平均に比べて短いなど，望ましい生活習慣が確立していることが読み取れる。
・家で計画的に学習できると回答した児童の割合は全国平均を下回るが，家庭学習に取組む児童の割合は高く，社会のニュースにも関心をもつなど学習に対する意欲は高い。計画的に学習を進めることができるよう見通しをもって学習に取組む態度を育てたい。
・読書が好きだと考えている児童の割合は多いにもかかわらず，授業時間以外での読書時間は短く，読書習慣をつけたり，読書に親しんだりすることができるよう家庭と連携して取組む必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組（全校で・学年で・学級で）

・読書習慣をつけるために，朝読書の開始を全校放送で行うなど全校一斉に取組む習慣を学校挙げて強化することで，効果的に実施することができるようにする。
・各学級での学習習慣，学習規律を確立するために，全校統一ルールである「藤松スタンダード」を作成し担任・児童が徹底できるようにする。

② 家庭生活習慣等に関する取組

・家庭での計画的な学習習慣を身に付けるために，家庭学習ノートの取組みを継続するとともに，内容や方法について各学級で指定したり，宿題やテスト前の課題として意図的に取り上げたりすることで，家庭学習の習慣化を図り，自分なりのテーマや方法をもって取組むことができるようにする。